

古坊中とは何だったのか

西巖殿寺は、726年にインドから来た最栄という僧によって創建されたとされます。時とともに、この寺は火山信仰と修験道の主要な拠点となりました。14～15世紀になると、数百人の山伏たちが寺の西側に広がる比較的平坦な土地を占有し、この地域で大きな力を持っていた阿蘇氏の庇護のもとで発展させるようになりました。この山伏と僧侶の緩やかな共同体は、古坊中として知られるようになりました。坊中とは「僧の集まり」、「古」という接頭語は「古い」という意味です。

古坊中は92の区画に分けられており、それらの区画には100平方メートルの小さなものから1,000平方メートルの大きなものまでありました。ここに住んでいた数百人の山伏は、37の立派な木造寺院と51の小くて簡素な茅葺きの小屋を建てました。彼らは日々、瞑想や断食、読経などの修行に励んだり、火口内の池を観察して神々の心の様子を探ったり、参詣者が火口を遥拝できるように彼らを一般の人に許された最も高い地点まで案内したりしていました。

1960年代、ある農家が牛を放牧しやすくするためにこの地域を整備していたところ、小さな石塔がいくつか発見されました。2000年代には、熊本大学の火山学者・渡辺一徳教授が試掘調査を実施しました。その結果、山伏の小屋の屋根葺き材だった焼けたススキや寺の建物の木柱が発見されました。